

保育巡回相談の実際

—5歳児用行動チェックリストの活用—

○白石京子（文教大学）、金谷京子（聖学院大学）、澤田藤子（しらかば幼稚園）、澤江幸則（筑波大学）、根岸由紀（植竹幼稚園）、森正樹（埼玉県立大学）、藤井和枝（浦和大学）

I. 問題と目的

保育所・幼稚園における5歳児の「気になる子」の支援は就学時健診を控え、様々な個別の支援が一層求められる。そのため保育巡回相談もより丁寧に実施する必要がある。今回は、担任保育者から「気になる子」として把握された2事例に対し、保育巡回相談時に「5歳児用行動チェックリスト」（金谷ら2011）をチェックしてもらい、カンファレンスの際に活用した。このことが、担任保育者と巡回相談員の共通認識の促進と丁寧な個別の支援の足がかりになった実際例を紹介する。

II. 方法

対象：S幼稚園の年長男児A児、女児B児とその担任保育者。チェック実施時期：20XX年9月。対象児のアセスメント：A児は忘れっぽく、多動で落ち着きがない。又、同年代の子どもとのやり取りが上手くいかない。B児は体のバランスが悪く、よく転んだり、ぶついたりする。また、人への関心や認識が薄い。今回は、金谷ら（2011）の「5歳児用行動チェックリスト」を活用し、カンファレンスで担任保育者と巡回相談員が共にチェックするなかで生じたズレについて協議し、対象児の具体的な支援の手立てについて検討する。「5歳児用行動チェックリスト」は、「注意と情動のコントロール」、「認知・言語の理解」、「運動スキル」、「人や物への関わり」の4つの因子で構成されており、各チェック項目について、平常の保育場面での行動についてチェックしてもらった。なお、このチェックリストの点数の見方は得点が高い方が問題行動の割合が高いと判断される、客観的指標である。

III. 結果

A児：担任保育者が記入したチェックリストの結果は、注意・情動47、人・物への関わり16、言語・認知19、運動29で、「注意と情動のコントロール」が47と高く、運動スキルは29であった。巡回相談員が記入したチェックリストの結果は、注意・情動64、人・物への関わり25、言語・認知35、運動29で、「注意と情動のコントロール」が64と高かった。担任保育者と巡回相談員の認識している方向性は一致しているが、「注意と情動のコントロール」の幅には差があり、運動スキルは同点であった。又、担任保育者は巡回相談員に比べると「認知・言語の理解」、「人や物への関わり」の認識が低いことが分かった。**B児：**担任保育者が記入したチェックリストの結果は、注意・情動41、人・物への関わり18、言語・認知27、運動37で、「注意と情動のコントロール」が41と高く、次に「運動スキル」も高かった。巡回相談員が記入したチェックリストの結果は、注意・情動49、人・物への関わり27、言語・認知38、運動41で、「注意と情動のコントロール」49と「運動スキル」41であった。担任保育者と巡回相談員の認識の方向性は一致しているが、「認知・言語の理解」、「人や物への関わり」での認識の程度が担任保育者より巡回相談員の方が高かった。カンファレンスでの「5歳児用行動チェックリスト」の認識のズレについては、担任保育者と巡回相談員で意見交換が繰り返された。その中でA児の担任保育者はA児の「注意と情動のコントロール」やコミュニケーションの課題を再確認し、保育の関わり方に気づきが生まれたという。B児の担任保育者はB児の「注意と情動のコントロール」、「運動スキル」の高さや「認知・言語の理解」にあたる言葉や内容理解のつまづきに意識が向き、今後のB児の個別の支援の手立てを一緒に考える運びとなった。

V. 考察

担任保育者は、日々の子どもの生活や遊びに携わり、家庭環境を把握しクラス運営を行う。巡回相談員は、「気になる子」の相談依頼を受け、担任保育者から聞きとりや対象児の観察からアセスメントを行うが、園に常駐しているわけではない。そのため対象児の対応には、きめ細かな情報交換や相互の専門性を活かした協働での支援が重要になる。今回の「5歳児用行動チェックリスト」の活用は、第1に対象児の支援での共通認識が促進すること、第2に担任保育者と巡回相談員のチェックのズレの協議で対象児の特性や支援方法を検討しやすくなること、第3に客観的指標であることから対象児の良い所や困っている所を具体的に話し合いやすいという利点があった。このことから保育巡回相談で担任保育者とカンファレンスする際に、「5歳児用行動チェックリスト」を活用することは、より丁寧な個別の対応に有効な手立てになることが示唆された。＜文献＞ 金谷京子ら（2011）：保育巡回相談ガイドラインⅣ。日本教育心理学会第53回総会論文集